

【3大贈り込み付録】

- 1 DVD おいしい山ごはん
- 2 剉岳・立山 登山MAP
- 3 白馬安全登山ガイドブック

充実！夏の北アルプス

山と溪谷

2012
July

7

【第2特集】
「山食」の達人
おいしい山ごはん2012

特集

心に残る山、 剉岳

岩と雪の殿堂、剉岳。
ノーマルルート、
バリエーションルートの
全方位から多彩で
奥深い剉岳の魅力伝える。

【特別ガイド】

「槍穂縦走」
完全ルートガイド

【緊急企画】

ゴールデンウィーク
北アルプス大量遭難は
なぜ起きた





「冒険とは、次の一步を踏み出す勇氣のこと」と語っていた河野だったが……

河野兵市 (このの・ひょういち)

1958年、愛媛県・瀬戸町に生まれる。高校卒業後、アルバイトで生計をたてながら、78年、1年3カ月をかけて自転車で日本一周1万6000kmを走破。自転車で世界一周への憧れを抱き、81年2月、日本を出発。アジア、オセアニア、北米、南米とたどり、途中、82年12月、ユーコン河2000kmを筏とゴムボートで下る。83年6月、初めての登山でマッキンリー登頂。8月から翌年2月にかけて北米大陸を徒歩縦断。85年から南米最高峰アコンカグアなど4000m以上の山9峰に登頂。86年3月、パタゴニアを徒歩縦断。87年7月からナンガ・バルバットに挑戦するが、6700m付近で事故に遭い下山。87年10月の帰国まで足かけ7年の旅を終えた。結婚しても旅を続け、その後も88年、宗谷岬から佐多岬まで3000kmを48日間で徒歩縦断。90年11月から翌年3月まで、サハラ砂漠5000kmをリヤカーで単独徒歩縦断。以後、舞台を北極に移し、95年3月から5月、北極単独徒歩到達。97年5月2日、日本人初の北極点単独徒歩到達に成功する。2001年から6年かけて、北極点から生まれ故郷の瀬戸町まで歩く「リーチング・ホーム」を計画、3月26日に出発したが、5月17日の交信を最後に消息を絶ってしまふ。5月23日、捜索機からリードに落ちていた河野の遺体発見の報がもたらされる。ソリと自分を結んでいたザイルを長めのものに換え、自分との距離をわいて荷重を分散させるなどの方法をとっていたことから、再凍結したリードを渡っている途中で氷が割れ、海中に落下したものと思われる。享年43歳。

連載 冒険者の墓碑銘 第7回

河野兵市 届かなかった リーチング・ホーム

北極点から生まれ故郷の愛媛県・瀬戸町まで6年の歳月をかけて歩く、「リーチング・ホーム」……。その第一歩を踏み出したばかりの河野兵市だったが、5000人にもおよぶ地元の支援者たちの夢とともに北極海のリードにのみ込まれてしまった。

神長幹雄 文 河野順子 写真提供

日 中の猛暑もようやく夕方になって収まる気配をみせはじめた1989年7月28日の午後6時半すぎ、私は大急ぎで東京・芝大門にある編集部から青山二丁目に向かっていた。月に一度、アジア会館の会議室で開かれる地平線会議の報告会に参加するためだった。そのころ月報の「地平線通信」に気になる行動者の報告予告が載ると、月刊誌の編集で多忙な時間をやりくりしながら、なるべく報告会には顔を出さようにしていた。その日は、世界中を7年にわたって自転車で回ってきた河野兵市の報告会だった。

地平線報告会というのは、世界中でユニークな地球体験をしてきた人たちを講

師に迎えて、毎月1回その体験を聞こうという集まりで、各大学の山岳部や探検部のOBが中心になって79年11月に発足した地平線会議がその母体になっていた。当時は日本を含め地球上のいたるところで日本人が活動しており、その数は年間の渡航者が350万人を超えるほどだったという。

117回を迎えたその報告会は、世界に出てみたいという一途な思いを「こげつく青春」というキャッチフレーズに込めたバイタリティあふれる河野の話で、これまでの生い立ちや世界放浪の軌跡が紹介されていた。私は、7年間に一度も帰国することなく、オーストラリアから北米、南米と自転車で回ってきたことよ

りも、ユーコン河を筏やゴムボートで下つたり、マッキンリーやアコンカグアなどの高峰9峰に登頂していたことのほうに興味があった。さらに破天荒でガムンヤラな旅のやり方にも惹かれていた。

ぜひまた話を聞かせてください、と言つてその日は別れたが、その後、河野は『地平線の旅人たち』のなかで次のように綴っている。

へなぜ自転車だけにこだわらずいろいろなことをしてきたかといえは、ひとつの偏つた見方、考え方をしたくなかつたからでした。せつかく広い世界を駆け回るのだから、いろんなことにチャレンジして、そこから学ぶのも日本ではできないことだと思つたのです。(『地平線の旅人たち』窓社)

自転車の旅にとどまらなかつた河野の挑戦

河野は1958年、愛媛県・瀬戸町(現・伊方町)のミカン農家に生まれた。四国の西の端に、佐田岬半島という爪楊枝のようなかたちをした半島がある。その中央部にある海に面したのどかな集落で育つた。高校入学とともに片道17kmの道のりを自転車で通学し、サッカー部に所属した。体力だけはあり余っていた。高校卒業とともに大阪に出て就職するが、タイムカードで区切られた日常に疑問を感じ、1年でやめてしまふ。そのころはまだ仕事を切り好みさえしなければ、現在とは違つてどうにでもなると思われていた時代だつた。

各地でアルバイトをしながら、1年3カ月をかけて自転車1万6000kmの日本一周を達成する。その後は1年間、

大阪市内で建設作業員、大工などのアルバイトをして280万円ほど貯め、81年2月、大阪を出発、世界一周の旅に出る。アジア、オセアニア、北米を自転車で回りながら、各地で資金稼ぎのアルバイトに励んだ。その間、82年11月には、ユーコン河2000kmを筏とゴムボートで4日間下る。途中、登山を教わり、83年6月、マッキンリーに、生まれて初めての山行で登頂してしまふ。8月から翌年2月まで6カ月かけて、ロサンゼルスからニューヨークまで北米大陸を徒歩横断。河野の旅の面目躍如といつたところだが、彼のすごいところは自転車だけに執着することなく、川下りでも登山でも徒歩横断でも、それまで経験したことのない行為に挑戦して、それをやりきつてしまふことだろう。

その後も北米のマウント・レーニアなど4000m峰3峰を単独登頂、メキシコのポボカテペトルなど2峰に登り、南米に入ってエクアドルの6000m峰コトパクシとチンボラソ、86年1月には南米最高峰のアコンカグアにも登つてしまふ。3月に入ってパタゴニアを徒歩縦断、その途中、ワスカランにも登頂。ここで知り合つた日本人登山家とナンガ・バルバットに行く約束をして、ふたたびベネズエラのカラカスから最南端のフェゴ島まで南米の真ん中1万kmを自転車で縦断してしまふ。それが87年3月のこと。

次の挑戦が、一気に8000m峰ナンガ・バルバットであるところがまた河野らしい。5月から6月までペルー・アンデスで氷壁トレッキングを積み、パキスタンのナンガ・バルバットに入山。河野を含む3名で頂上アタックの日、C3上



1990年、サハラ砂漠中央部で砂嵐に遭う

部の6700m付近をルート作中、アイズブロックが崩壊して河野の顔を直撃、重傷を負つてしまふ。上唇と顎に27針縫う重傷だつた。さらに頭部を打つたためか、のちにC1で頭痛に悩まされ、結局、河野のナンガ・バルバット登山は終わる。

「日本に帰つたら、もう旅も冒険も続けられなくなる」

河野は、当時、そこまで思いこんでいた。すでにナンガ・バルバットの氷河上で「次」の冒険、サハラ砂漠縦断を模索していたのである。かつて私がよく東南アジアを旅していたとき、場末の安宿で何人もの旅に飽いた若者たちを見てきたことがある。目的がなく、ただ漫然と旅を続ける若者たち——。しかし河野は旅の途中からいつも「次」を明確に意識しながら、夢を育てていくことができる人だつた。だから、一度はオーストラリアで資金を稼いでサハラに行こうと決めていた河野だつたが、結婚を契機に、躊躇なく7年にもおよぶ長い旅に終止符を打つてしまふ。それは夫として、後に父

親としての責任感の強さ——。家庭をもちながらも冒険を続けていくという覚悟が、このときできていたからだろう。

1987年10月帰国した河野は、結婚して東京に住み、植木職人として働きはじめた。当然、家庭をもつても、河野の登山と冒険は続く。88年5月には、稚内の宗谷岬から鹿兒島の佐多岬まで日本列島3000kmを48日間で徒歩縦断。また7月には旧ソ連のパミール国際キャンプに参加、コルジエネフスカヤ峰とコミュニズム峰のふたつの7000m峰に登頂してしまふ。そして90年11月から翌年の3月にかけて、アルジェリアからトーゴまでサハラ砂漠5000kmをリヤカーを引きながら単独徒歩縦断に成功する。32歳、これから本当にやりたかつた冒険へと突き進んでいくのである。

冒険とは、次の一歩を踏み出す勇氣

ちようどそのころ、サハラ砂漠から帰つた河野に、私は何度か会つて話をして

いる。「どこかに行つてみたい、未知の世界を体験してみたい。そんな思いがずっと続いていました。だから水が一滴もない砂漠を歩いていいたとき、地球でいちばん寒いところはどこだろうって考えたんです。それは北極じゃないかって」

やはり「次」を意識していた。灼熱の砂漠から厳寒の北極へ、なにが河野をそこまで駆り立てるのか——。

「河野さんの旅はひとつにくくりきれない。これまで十種競技や異種格闘技をひとりで闘つてきたようなんなんです」
「でも、今は違つた。一度こうと思つと、

じつとしていられない性格で、それが北極だった。もう頭の中は北極でいっぱいなんです」

自転車による世界一周への憧れが、やがて川下りから大陸の徒歩縦断や横断行、高峰登山や砂漠踏破に行き着いた。そしてその先に芽生えた北極への小さな憧れ、それもいずれは北極点から日本まで歩いて帰ろうという思いを、90年当時から志向しはじめていた。生まれ故郷まで歩いて帰る「リーチング・ホーム」というひと滴の夢が、サハラ砂漠の乾いた大地のなかでふくらんでいく。自分のなかに芽生えた小さなつぼみを大切に温め、肥料をやり、そして少しずつ大きく育てていったのだ。

一方、世界一周の自転車旅行で見せていたあのガムシヤラな強引さは消えていく。これからは生命の危険と紙一重の冒険が始まったわけで、若いころの無茶な行動が陰をひそめ、その一方で、一直線の一途さだけは変わらない。変化の兆しが見えたといえは、これまでにない慎重さと時間と手間をかけた入念な北極への

準備だった。92年2月、アラスカに渡りユーコン河で耐寒訓練、そして94年3月には、カナダのレゾリュートでさらに極地トレーニングを積み重ね、95年3月から5月にかけて北極極まで600kmを35日間歩き通した。少しずつだが確実に北極でのノウハウを学び、北極点への夢をさらに大きくふくらませていったのである。

しかし、資金難という大きな壁が立ちふさがっていた。だがそれも「リーチング・ホーム」に賭ける河野の一途な思いが、故郷・松山ですこしずつ実を結んでいく。96年11月には遠征隊事務局が設置され、広報と資金調達を一手に引き受け、精力的に活動を始めた。名簿に載っているだけで5000人もの人たちがカンパに協力してくれたのだ。

そしていよいよ97年3月4日、カナダ最北端のワードハント島を出発、直線距離にして約780kmを走破し、60日後の5月2日、ついに北極点に到達する。日本人として初めて、北極点単独徒歩到達に成功したのである。一度は体力消耗と孤独感から北極点到達をあきらめかけたこともあったが、支援者たちの温かい励ましに気を取り直しての北極点だった。

（見上げた空は、雲一つない。ブルースカイだった。のが、強く心に焼き付いた。僕が歩いてきた真っ白な氷原は、地平線のように大きく弧を描いて続き、その上には、紺碧の空が、どこまでも澄んで広がっていた（北極点はブルースカイ）
愛媛新聞社）

こうした支援と世論のあとおしで、河野の「日本人初の北極点単独徒歩到達」は大変な騒ぎになっていた。5月4日付

の地元・愛媛新聞朝刊一面では11段ぶちぬきの破格の扱いで「河野さん北極点到達」を報じ、在京の新聞各社も競うようにして大きく報道していた。5月8日の夕方、私も、当時の総理大臣・橋本龍太郎から祝電が届いたという知らせを受けたことをよく覚えている。それほど周囲は大きな騒ぎになっていた。

（この旅にはふたつの意味が込められている。ひとつは、旅人である僕が最終的に生まれ故郷に帰っていくということ。もうひとつは、自然のなかで人間らしく生活することのすばらしさを行く先々で訴えたいということだ（『山と溪谷』97年7月号）

帰国の騒動からひと息ついた6月上旬、私たちは河野に「僕が北極点に運んだもの」という手記を書いてもらった。その一節で、今度はみんなと一緒に歩きたいと強調していた。

6年という歳月をかけて「生まれ故郷に帰ろう」という「リーチング・ホーム」北極点からワードハント島まで逆回りで南下、島の海岸沿いにカナダに上陸して北極海沿岸に沿ってアラスカに入り、ベリング海峡をロシアに渡り、さらにオホーツク海沿いにサハリン、そして稚内を上陸し、生まれ故郷の愛媛・瀬戸町を目指すという壮大な計画だった。

問題は北極圏での結氷状態だが、ワードハント島に上陸しさえすれば、あとはほぼ陸上を歩くだけである。危険が予想されるのは、プレッシャーリッジ（海流によって突然起こる氷の隆起）などの乱氷帯の通過とリード（氷のさげめ）の広がり、そして猛烈なブリザードであろう。しかし、河野はこれまで何度も困難を克

服してきたし、事務局の支援体制も整ってきたところだった。2001年3月26日、河野は北極点から「リーチング・ホーム」の第一歩を踏み出した。

しかしその5日後には「緊急補給」をベースキャンプに発信。連日マイナス50度前後という猛烈な寒さのため、河野は鼻と両手足にひどい凍傷を負っていた。BCで治療を受け、今度こそ満を持して4月20日、再度のスタートを切った。その後は順調に南下を続けたが、5月16日突然、「北緯83度56分、西経74度55分」という位置情報と、「リードが渡れない」という緊急メッセージを残して消息を絶ってしまった。すでに696kmを走破、ワードハント島まで84kmを残すのみだった。

支援の輪は、地元・松山を中心に大きく広がっていた。その思いに一生懸命応えようとする河野がいた。その一途な姿を見て、人々はますます応援したくなる。そしてその期待にさらに応えようとする河野——。そのすべての思いを、北極のリードがみ込んでしまった。

河野の妻・順子はその著書「絆——河野兵市の終わらない旅と夢」（河出書房新社）の最後を、次の言葉で結んでいる。冒険とは、決して命を落とすことではない。今いるところから、一歩踏み出す勇気のことなのだ。河野兵市（敬称略）

かみなが、みきお 1975年、山と溪谷社に入社。「山と溪谷」「愛媛」などの雑誌編集を経て、94年11月から98年11月まで「山と溪谷」編集長。その後は出版部に所属し、おもに山岳図書の編集を担当。著書に「運命の雪稜（山と溪谷社刊）」など。日本山岳会会員。



1997年5月2日、日本人初の北極点単独徒歩到達に成功した